籠瀬良明さんへのオマージュ

訳書の『話を聞かない男，地図が読めない女』が近ごろ世間に受けていると聞く。空間能力なるものの男女差に起因するとか。この書にあやかって言うと，私から見た籠瀬さんは，「話を良く聞いてくれる友，地形図がさっと読める地理学者」であった。心の中をすっかり開いて話し合える友人，親友とはこのような間柄をさすのだと思う。

籠瀬さんが日本大学の講師になられたのは1947年のことで(非常勤，2年後に専任)，奇しくも同年に私も立命館大学講師に任じられている。戦前・戦中・戦後を一貫して日本の地理学を支えてきたのは国立大学の地理学教室であって，私立大学の教室などは物の数でもなかった。千年の古都を誇る京都では，私学出身の大学教師は「毛並みが良くない」と広言する教授さえみられたので，私も立命館大学に勤めたものの，精神的には辛い思いが絶えなかった。籠瀬さんも同様な境遇に置かれていたらしく，国立大の著名教授が天下って来たので，いわゆる頭を押さえられた状態が続き，教授昇進の見込みがないように思われたらしい。両者の共通点から，籠瀬さんと私とが近付きになるのに，さほど年月がかからなかった。二人はウマが合ったわけである。

ウマが合うとは話が速い。私がフランス留学から帰った後の1960年代に，月刊の雑誌『地理』に紙面を提供して頂いて，「東の地理・西の地理」を，これに続いて「日本の地理・世界の地理」が掲載された。これらをまとめたのが『ニッポン再見』と題する共著で，1970年の同じく古今書院から出版されている。

籠瀬さんのご生涯を振り返って改めて思い起こすのは，1955年に日本大学助教授を退職して横浜市立大学教授に移られたことである。日大地理スタッフの籠瀬さん冷遇があまりにも歴然としていた。しかし，この点は差し置いても，私の目には「母校を捨てた」と映じ，籠瀬さんに対して失礼をかえりみずに，かなり厳しい批判のことばを述べたことを今なお記憶している。地図学史で名のあった鮎沢信太郎教授に口説かれたためだと，後で承って，半分ほどは納得した。そのかわりに，9年後の1964年に日大文理学部に教授として戻られたおりは，心から歓迎の意をあらわした。ほんとうに嬉しかった。日大地理も，これで磐石だと思った。

(1993年6月5日　石井 實　撮影)

籠瀬さんも私も，地理学関係の学会が催す大会が好きであった。研究報告を聞き，シンポジウムに出席して，自分の知見を広めるだけでなく，いろいろの専門家に出会うことができるからである。これを機会に籠瀬さんに会える楽しみもあった。こういう仲の良い関係を知る人は，私に対し，籠瀬先生はただ今

第○会場におられますよと，教えてくれた。研究発表の合間や休憩時間その他を利用して，必ずと言って良いほど話し合った。話の内容は深刻な問題も時にはあったが，たいていは楽しむための会話と言ったほうが良いようなものであった。

地形図の読図に関する著作は，名称を変えながらもロングセラーとなっていた。私もフランスをはじめ，イタリアやドイツの地籍図および地形図を読む際に，籠瀬さんの著作はいささか役に立ち，また励みにもなった。

籠瀬さんは1981年に日大を退職され，私はその４年後に立命館総長の役職を引受けざるをえなくなった。学会に顔をだす機会が得られず，互いに顔を合わす機会はほとんどなくなった。２期６年の重荷を外したが，容易に地理学の勘が戻ってこない。それでも籠瀬さんとの手紙のやりとりを続けていた。昨年春，早稲田大学で開かれた大会のレセプションには，籠瀬さんが手押し車を押して出席された。そうして高弟の立石友男さんから昨年末に訃報を受け，私は呆然と立ち尽くしてしまった。

まな弟子の石井實さんが写されたお顔のなんとにこやかなことか。

籠瀬良明さんは多くの優れた弟子を育ててこられた。あなたは，これらの人々の心に，私の心の中に常に生きています。あなたは私の親友であり続けるでしょう。心から御冥福をお祈り致します。

（谷岡武雄）